

九条はらまち

福島県南相馬市「はらまち九条の会」 No.199

2012(平成24)年9月30日(日)発行



○秋の七草は、萩(はぎ)・雄花(おぼな・すすき)・葛(くず)・撫子(なでしこ)
・女郎花(おみなえし)・藤袴(ふじばかま)・桔梗(ききょう・あるいは朝顔)。
○春の七草は、「せり・なずな・ごぎょう・はこべ・ほとけのざ・すずな・すずしろ」。

3.11東日本大震災・原発事故・・・私はどう思う 18

高い放射能の中に置き去りにされた浪江町民

双葉郡浪江町赤宇木(二本松市に避難)・菅野禮子さん

自宅は原発から30*の浪江町赤宇木

私の家は浪江町の山間部の津島地区赤宇木の白追、北隣が先日完全封鎖になった飯館村長泥です。第一原発から約30kmの地点で、放射線量が最も高いことで全国的に有名になってしまいました。

原発事故のため、昨年3月15日から夫の升(のぼる・66歳)、父の勘(さだむ・91歳)、母のナツヨ(83歳)の4人で二本松市に避難しています。



「もう一度、リンドウを栽培したい。諦めない。」と話す菅野禮子さんと、夫の升(のぼる)さん。避難先の二本松市で。

父は昭和17年、満州国に入植

まずは、父の満州での苦労からお話しします。

父は上川崎村(現・二本松市)の農家出身でしたが、阿武隈川沿いで農地も少なく生活も苦しかった。そこで昭和17年1月、「いつでも入植できるぞ」という勧めで満州国北部の竜江省(現・黒竜江省)に、父母と兄弟9人で向かいました。

下学田開拓村という入植地で、大豆やトウモロコシを栽培。冬は零下40度近くにもなる寒さですが5月になるといい季節になり、作付けに励んだそうです。

父は徴兵され、ロシアの侵入でシベリアへ

ところが入植の翌年の昭和18年、父の勘は陸軍二等兵として徴兵され、対ロシア戦を想定し陣地をあちこちに構築したそうです。敗戦間近かの昭和20年8月9日、ロシア軍が突然、戦車数百台で満州に攻め入り、父はロシアの捕虜になりシベリアに送られてしまいます。厳寒で食料もない強制労働の抑留生活で、かなりの人が亡くなったといわれています。

関東軍は退却 農民が取り残された

一方、父と一緒に入植した叔母の話では、開拓団に残された家族もそれはもう悲惨で、毒を飲んで自決した人も出たり、みんなで死のうと一旦は決意したこともあったそうです。悲惨極まりない状況の中で、関東軍はいち早く退却、開拓団の幹部や満鉄や政府関係者の家族は、真っ先に日本に帰国し、取り残された入植農民が辛酸をなめました。父の先妻も帰国できたのですがすぐに亡くなり、父との間の子どもも亡くなったそうです。

引揚げて、浪江町の国有林地に入植

幸い父は、昭和23年に京都の舞鶴港に引き揚げることができましたが、帰国後の苦労も大変なものでした。父たちを満州に誘った同じ人が今度は、「国有林が手に入るから、入植しないか」と話をもちかけ、それで父は、やむなく浪江町の阿武隈山中の津島地区に入植したのです。

毎日山に入り木を切って木炭を作り、それを売りました。機械はないのですべて手をつかい、畑を開き野菜を栽培し、2、3年後には小さな田んぼも出来たそうです。そして父も再婚し、昭和50年に私が生まれ、数年して山のふもとに移り、田んぼも10アール程度になっていました。

私は昭和50年に結婚、リンドウの栽培も

私は農作業を手伝いながら、昭和41年に福島県立小高農業高校津島分校に入学。昼間の定時制で、夏休みと、農繁期に2週間ほどの春、秋休みがあり、朝から夕方まで懸命に家の農作業を手伝いました。昭和45年3月に高校を卒業し、浪江町の電機メーカーの工場に就職。

やがて同僚の兄とお見合いをして昭和50年に結婚、お嬢さんに迎えました。父母は畑仕事、私はヘルパーの資格をとってお年寄りの世話をしながら、リンドウの花を栽培するようになり、リンドウと露地栽培の畑は24アールありました。

また夫は、浪江町の電子メーカーの工場に30年勤め、その後は大熊町の造園会社で働いていました。2年前退職し、そこで週3回のアルバイトに切り替えていました。

(裏面に続く)

すべてを奪った原発事故

3月11日、私は家に、夫は大熊町にいた

その日、昨年の3月11日午前中、私はヘルパーとして3時間働き、お昼に自宅に戻っていました。寒い日でしたから部屋を暖め、茶の間で横になって、父母と一緒にテレビを見ていました。

午後2時46分、突然の地震です。窓から軒先の瓦が5、6枚ばらばらと落ちてくるのが見えました。「これは危ない」と思って、3人で外へ出ました。そのうち雪が散らついてきて、電話はつながりませんでした。

その頃夫は、第一原発のある大熊町内の造園の畑で、ナナカマドの苗木をとっていて、突然近くの車が大きく揺れ始め、慌てて車が動かないようにギアを入れたそうです。たいしたことはない、そのまま夕方まで苗木取りを続け、会社に6時半に戻ると、社長に「こんな時まで何やってんだ。みんな帰ったぞ」と怒られ、会社からガソリンを分けてもらい、帰路につきました。すると通過した双葉町では電柱が傾いていたり、線路が落ちていっているのを見ながら、自宅に向かいました。

区長さんから「津波で請戸は流された」と

午後8時ごろ、自宅でみんなでおにぎりを食べていると、区長さんが来て、「浪江町の請戸（うけど）地区の住宅は全部津波で流された」と。テレビは石巻市などを映して、原発の話はなかったと記憶しています。余震が続き、コタツの周りに蒲団を敷き、荷物をリュックに詰め、靴下をはいて横になっていました。

12日 津島地区にどんどん避難者が来て

翌12日朝、私は車でヘルパーの仕事に向かいました。でも様子が違います。幹線道路の国道114号線に出ると、浪江町東部の人々の車がどんどん避難してきています。私はその地区に住む妹が心配になり、夫と捜しに行きました。多くの家が倒れ、塀がひっくり返っています。妹は見つからず、13日になって津島中学校に避難していることがわかり、私の家に来てもらいました。この頃になってようやく原発事故が起きたことを知りました。窓を閉めマスクをして家にもこもっていました。友人も避難してきて、我が家は総勢10人に膨らんでいました。

なぜ高い放射線量を教えてくれなかったのか

15日昼食を食べ終わった頃、町内会の組長さんが、「二本松市に避難する」という、町からの初めての避難指示の連絡用紙を持ってきました。

私たちの赤宇木地区は、特に放射線量が高かった所です。文科省委託の測定車が、こっそり測定していたことを知ったのは5月になってからです。国も県も何も言わなかったし、町にも知らされていなかったのでしょう。夫は近所の人たちとずっと、地震で壊れた道路を直していたので、大量に被曝しているはず。危険と分かっていたのに、なぜ教えてくれなかったのか。ひどい話です。

菅野さんの避難地図
浪江町津島から、二本松市・北塩原村・二本松市と転々と移動。



ペットを連れて寒い車の中で寝たい

3月16日、車2台に分乗して二本松市の息子宅へ避難し、さらに同市のあだたら体育館で生活しました。ペットの猫のチョコと犬のナナも一緒に、私は猫を抱いて駐車場の車の中で寝ましたが、朝になると水が凍っていて、本当に寒かった。

体育館には東京電力の幹部が来て、ただ頭を下げて終わり、何を言っても黙って聞くだけ。以後、東電からの謝罪はありません。

4月10日に会津の北塩原村の「温泉民宿りんどろ」に移り、本当に親切にいただき感謝しています。私たちはその畑で農業を手伝ったりしました。さらに私たちは7月30日に二本松市の借上げ住宅に移るのですが、北塩原村の民宿に避難していた仲間たちと一緒に、感謝をこめて昨年9月から11月まで民宿に泊まり込みで援農してきました。

津島の自宅は住めるのに草はボウボウで

今年になって3回、食器や写真や衣類を取りに自宅に帰りました。畑はイノシシに荒らされ、草はボウボウです。雨漏りもせず、電気も通じるし水も出る。それなのに放射能で住むことができない。仮に除染をしても、家の周りだけで、土もいじれない。山を除染しないと放射能物資は雨に溶けて流れ出し、すぐに元に戻ってしまいます。

去年の夏帰宅したとき、畑のリンドウが美しく咲いていました。本当はいけないのですが、私は一輪だけ持ち帰りました。本当に悔しい。もう住めないと思うし、孫をそこに連れて行くこともできない。今はもう、二本松市かその周辺に新しい生活の場を探そうと思っています。

リンドウの花をもう一度咲かせたい

国も東電も福島を本当にバカにしています。子や孫の代まで汚染を残しているのに、事故は収束したなんて言いますが、福島の人々は誰もそうは思っていない。福島の人々をこんなに苦しめて、補償などでは解決しません。原発は一刻も早く全廃してほしい。

まだまだ私は諦めてはいません。やはり夫も私も農業が大好きで、百姓をやりたい。新しい地でまたリンドウを栽培し、花を咲かせ、せめて自分が食べる野菜を作りたい。それが私の夢です。

(2012年8月『朝日新聞』デジタル・菅野禮子さん「中国で浪江で、奪われた日常」より、要約いたしました。)

